

映画小説術の提示
—高野和明作品を参考に—

コース 国際文化コース
学籍番号 140099
氏名 浦松 良多
指導教員 加藤 千博

高野和明という映画界出身の小説家がいる。映画監督の小中はアメリカ映画では原作小説の著者自身がシナリオを書くことは珍しくないと述べている。このことはアメリカのホラー作家のステューヴン・キングが自身の作品の映画監督を務めたことなどから明白であろう。そして小中は映画界と小説界の両方で活躍する高野のような存在は日本では貴重だとも述べている。映画作りで学んだ事は小説を書くことに応用できると語る高野の小説は読む者に映画を観ているような印象を与える。本論文は高野の作品に新たな小説技法の可能性を感じ論じてみたいと考えたことに端を発した。そして、映画の技法を上手く小説に転換させて映画的印象を読者に与える彼の小説技法を「映画小説術」と呼ぶことにし、文学界における新たな小説技法として「映画小説術」を提示する事を本論文の主題とした。

本論文では「映画小説術」の技術体系を構成する各要素を解き明かし、そして、その要素がどのように映画的印象を生み出すのかについても解明する事によって「映画小説術」の定義づけを試みた。次に映画の歴史や映画と鑑賞者との関係性に注目し、「映画小説術」の性質や読者との相互的な関係性を解き明かした。最後にそれらを踏まえた上で「映画小説術」の小説技術体系における位置づけを明らかにし、「映画小説術」の今後の展望について考察した。本論文では高野の代表的な著作であり現在において彼の最新作である『ジェノサイド』(2011)を主要な題材とし、『13 階段』(2004)、『グレイヴディigger』(2005)、『幽霊人命救助隊』(2007)、『6 時間後に君は死ぬ』(2010)を補助的な題材とした。

第1章では映画独自の技法を上手く小説に応用した際に、応用したものをより効果的にするための「映画小説術」を支えている文体や描写の方法などの文章の基本的な構成、つまり、「映画小説術」の基盤に相当する要素である「ハードボイルド文体」と「描写のリアリティさ」について論じた。そして、映画のストーリーテリングと「ハードボイルド文体」の特徴を比較した結果、両者に「直接的な心理描写を極力排して、主に登場人物のセリフや行動といった3人称の客観的な描写を使う事によって鑑賞者に登場人物の心理や思考を想像させ、物語が伝えられる」という物語を鑑賞者に提示する際の構図の類似性を突き止め、その類似性によって「ハードボイルド文体」が物語全体を通して映像的印象を生み出すという事が明らかとなった。また、映像を通して物語が語られる映画の情景描写は「固定的」であり、視覚的な範囲にとどめると観客の解釈も固定化される。そして、これに反して小説は文章中の描写をもとに読者が各々で想像し、物語を享受していくという「流動的」な特徴を持ち、それ故、小説は与えられた描写とそれをもとに描写を想像する読者と

の間の相対的で相互的な関係性により成り立っていると言う事を突き止めた。そして、これらの事実から「描写のリアリティさ」（描写のディテールまでこと細かく描き、多くの読者が同じような描写を想像できるほどのリアリティを持たせる事）によって、小説の描写から得られる解釈をより「固定的」にする事で映像から得られる解釈に限りなく近づいていき、結果として映画的印象が生れるという事が明らかとなった。

第2章では、「編集」、「場面転換」、「照明」、「カメラの位置」の4つの映画特有の技法に焦点を当て、それらの技法の定義や映画内における効果をジェニファー・ヴァン・シルの意見を参考にしながら論じた。そして、高野の諸作品の中でそれら4つの映画技法が上手く転換されている例や上手く転換したことによって生じた小説内における効果を示した事で、映画特有の技法を小説に転換する方法や転換する事によって生じる小説内における効果が明らかとなった。また、映画を鑑賞した経験のある人が映画技法を上手く転換させている小説を読む事で、過去の映画鑑賞体験も後押しし、小説に散りばめられた映画特有の技法に無意識に映画の匂いを感じ取り、それが映画的印象を生み出すという事が明らかとなった。そして「映画小説術」の定義づけを行った。

第3章では、本論文の1章と2章で説明した「映画小説術」が成立するための外部的な要因である読者との相互的な関係性や映画小説術が持つ性質に焦点を当てた。そして、「映画小説術」は読者に映画についての知識があつて初めて成立する小説技法であり、読者の映画鑑賞経験の有無や映画技法についての知識の有無などによって「映画小説術」を駆使した小説が読者に与える映画的印象の程度も変わってくるように映画小説術と読者の間には相互的な関係が存在するという事が明らかとなった。また、「映画小説術」は映画独自の技術を小説に転換する小説技法であるが故に常に最新の映画技術の影響を受け続ける小説技法であり、映画の進化と呼応するように「映画小説術」自体も形を変えながら進化していくという性質を持っている事が明らかとなった。そして、「映画小説術」は決して一過性の小説技術ではなく、映画の進化と呼応するようにそれ自体も進化していくという性質を持っている事から、廃れて過去の技術となる可能性がなく常に小説技術体系の最先端に存在し続けるものであり、あらゆる小説技法の中でも特殊な位置づけとなる事が明らかとなった。そして、そのような性質故に「映画小説術」の進化には終わりがなく、映画という娯楽作品がその終焉を迎えるまで共に寄り添いながら、影響を受け続け、進化していくであろうと論じた。

これまでの研究から「映画小説術」は、ハードボイルド文体と描写のリアリティさをその構成要素の基盤とし、編集、場面転換、照明、カメラの位置の4つの映画特有の技法を転換する事で読者に映画的印象を与える小説技法であると定義する事ができ、読者との相互的な関係性や特殊な性質を持ち、小説技術体系においても特殊な位置づけであるという結論に至った。映画の進化と共に「映画小説術」の構成要素を改良していく事が今後の課題である。「映画小説術」という新たな小説技法の可能性を提示した事に本論文の意義がある。

Post-postmodern Foresight from the Philosophy of Philip K. Dick: Warning to Our Technology-centered Society

コース 国際文化コース
学籍番号 140322
氏名 澤田 義典
指導教員 加藤 千博

21 世紀は A. I. やロボット等の画期的な技術が発明され、暮らしの利便性が絶えず向上する科学技術中心主義社会に突入しつつある。一方で、科学技術の過度な発達により世界規模での環境破壊やテロ行為の増加等、深刻な問題が生じていることもまた事実である。その中で科学技術が人類に与える負の側面を架空の未来社会を描くことによって批判する「ディストピア SF 小説」が世界的に流行している。ディストピア SF 小説の代表的な作家として、フィリップ・K. ディックが挙げられる。

本論文では、ディストピア SF 小説が勃興する 21 世紀において、主に科学技術が人類に与える負の側面について着目する。また、負の側面が現代社会に与える影響や脅威に対して人間が持つべき姿勢をディックの作品分析から見出すことを主題とした。このような問題を抱える現代社会に対してディックの作品が与える知恵や解決策を模索することが本論文の目的である。

第一章では、科学技術がもたらしつつある深刻な社会現象として多くのメディアが取り上げる「監視社会」と「アイデンティティの喪失」という二つのテーマを分析し、科学技術の負の側面を明らかにした。それぞれのテーマの背景や人類への影響を分析することで、人類に与える今後の影響を論じた。監視社会は、21 世紀以降に増加したテロリズムを例とする社会的背景と 20 世紀作家オーウェルの代表作「1984」を例とするディストピア小説の流行による文化的背景により、予測不能な危険に対する未然防止の策として出現したということが明らかになった。アイデンティティの喪失は、Twitter や Facebook のような SNS と呼ばれるオンライン交流サイトのユーザーが匿名利用によって複数のアイデンティティを保有したり、政府や組織が SNS を通した宣伝活動によって世間を操作したりすることを背景に個人が自分の意思を持たなくなる現象であることが明らかになった。科学技術が与えた 2 つの負の側面を分析した結果、これらの負の側面や人類が科学技術に対して持つべき姿勢を考察するためにポスト・ポストモダニズム理論の観点から問題を捉えることの重要性を示した。

第二章では、ディックのポストモダニズム理論を現代のポスト・ポストモダニズム理論に応用するために彼自身の作品を分析した。特に作品を通してディックの伝えるテーマや未来に起こりうる危険への先見性を読み取ることに焦点を当てた。1956 年出版の「マイノリティー・レポート」では、高度な監視システムを搾取する組織のプロパガンダや監視シ

システムを受容する市民や社会全体の間には蔓延するイデオロギーについて論じた。1968年出版の「アンドロイドは電気羊の夢を見るか?」では、共感ボックスと呼ばれる仮想現実上の世界で人間の意思を集散的に統一することが可能な科学技術システムとそのような高度な科学技術の使用による個人のアイデンティティの喪失を論じた。2つの作品を分析した結果、それぞれの社会で蔓延するイデオロギーと疑いなく科学技術を利用する社会の関係性が浮き彫りになり、既存の科学技術システムに対して「懐疑的な視点」で考えることの重要性を提示した。

第三章では、第二章で分析したディックのポストモダニズム理論に基づく批判を再び整理し、現代社会におけるポスト・ポストモダニズム理論、そして人類と科学技術の関係性を論じた。2つの作品分析の結果、ディックは曖昧に終わる物語の結末を読者自身の意思をもって考え予測する批判的姿勢を持つことの重要性、そして科学技術が人類に与えるイデオロギーと疑いなく科学技術を楽しむ社会の危険性を提示していることを推察した。続いて、現代社会の A. I. に焦点を当て、人類が現代の科学技術との関係で抱えることになりうる危機を論じた。A. I. によって処理される膨大な量の情報がイデオロギーの形で人間による決定論を脅かすという危機を示した。よって人類が今後の科学技術との関係性を構築する上で、やはり「懐疑的な視点」と既存の科学技術システムそして社会構造に安住すべきではないということが明らかになった。また、情報コミュニケーション社会に焦点を当てた議論において、メディアから発信された情報や SNS を通じたコミュニケーション等で「標準(スタンダード)」という1つの尺度に懐疑的な姿勢を持つことの重要性を示した。これにより科学技術によるイデオロギーが蔓延する社会において何を標準とみなすかを自ら考え、決定することの必要性を示した。

これまでの考察から人類と現代の科学技術の理想的な関係を構築することができるのかという問いを導き出した。科学技術が人類に与える負の影響の大きさや数を考慮に入れると、理想的な関係の構築は困難であるといえる。しかし、ディックのポストモダニズム的視点を参考に科学技術中心主義社会の中で科学技術と向き合うための人間としての1つの態度を持つことの重要性を主張した。以上のことを踏まえ、科学技術の恩恵を享受する現代の人々は「懐疑的な視点」を持ってより高度な発達を遂げる科学技術と接していくこと、そして何より科学技術の持つ危険性を先見的に批判したディックの価値観や先見性を学ぶべきであると結論付けた。21世紀の科学技術中心主義社会において現代の人々が科学技術に対して持つべき姿勢に警鐘を鳴らしたディックの価値観と先見性の重要性を提示したことが本論文の意義である。

British Immigration Issue: Analysing from the Relationship between Brexit and the Premier League

コース 国際文化コース
学籍番号 140510
氏名 葉玉 直紀
指導教員 加藤 千博

イギリスは2016年6月24日に自国のEU離脱を巡る国民投票を行った。その結果、EU離脱派の票が51.9%と僅かに残留派の票を上回りEU離脱が決定した。イギリスのEU離脱を「Britain」と「Exit」を掛けて「Brexit」という。筆者は2016年12月と2017年8月に渡英し、街頭インタビューを通してイギリス国民のBrexitに対する考えを探り、多くの人々が移民に関する間違った情報を信じていることを学んだ。イギリス国民の生活を大きく変えうるBrexitを情報誤認でやり過ごすことは如何だろうか。また、日本も外国人労働者を多く受け入れる方向に変わりつつあるのでBrexitから学ぶべきことがあるのではないだろうか。本研究はこのような着眼点から出発した。

本論文では、イギリスの移民問題を主題に、Brexitとフットボールという一つのイギリスの象徴的な文化の間にある関係性から考察することを目的とした。そのため第一章ではBrexitまでの経緯を考察し、そこから見えた移民問題に焦点を充てた。国民投票当日までは離脱派と残留派の支持率は拮抗していたが急進的な離脱派の主張を信じ込んだ人々が投票日までに次第に増え離脱派が多数となったことが明らかとなった。インタビューでは政治的無関心や誤った情報を信じたことを示唆する回答があり、また「移民」に関して回答する人が多かった。イギリスは1950年代以降、労働人口を増やすため、またEU加盟により移民を増やしてきた。しかしそれと同時に、イギリス人は移民に労働の機会を奪われているのではないかと、移民はイギリスに不必要なのではないかという懸念が生まれ、それが原因となって多くの誤解が生じていることが明らかとなった。

第二章では、移民とフットボールとの関係性を提示するために、イギリスのフットボールリーグであるプレミアリーグを考察した。プレミアリーグが世界一と評される理由は多数の移民労働者でもある外国人選手が在籍していることだと主張した。1995年のThe Bosman RulingにおいてEU出身選手は移民労働者としてEU域内の自由な移籍が保障された。ヨーロッパの他のリーグも同様に外国人選手を獲得しやすい環境がThe Bosman Rulingを通してできたが、それはプレミアリーグに集中して起こった。その一つの理由としてプレミアリーグの高い競争力を提示したうえで、その競争力を作っている原動力が外国人選手にあることを主張しプレミアリーグにおける外国人選手の重要性を明らかにした。

第三章では、Brexitがプレミアリーグにどのような影響を与えていくのかということをも移民・外国人選手の観点から考察した。BrexitによってEU域内からの選手の流入は減少

し、それはプレミアリーグにとって大きな損失となってしまうと仮定した。さらにイギリスの内務省がこれからの移民政策に関して言及している「イギリスに輝きを齎す者、懸命に働く者は移民として受け入れる」という主張を引用した上で、フットボーラーだけが移民として優遇されるべきという考え方は間違っていると主張した。フットボーラーのイギリス社会への貢献度は注目されるが、他の移民のイギリス社会における大きな貢献は無視されていることを指摘し、フットボーラーもほかの移民も平等に扱われるべきだと結論付けた。そして最後に、移民問題をフットボールや **Brexit** の視点から考察したように、誤解を持たないためにもあらゆる切り口から様々な目線に立って考察することの重要性を提示した。

こうした分析や考察より、人々の移民に対する誤解が生じていることが分かり、それは人々が政治家の文言を鵜呑みにしていたり、移民を利己的に区分していることが原因であると明らかになった。フットボーラーは高度技能移民として社会的な貢献度の高さを評価されて優遇され、そのほかの労働者移民は社会に必要でないとみなされ排斥されるのは間違っている。どちらもイギリス社会の繁栄と成長のための重要な要素であるために平等に扱われるべきだと考えられる。

本論文では、イギリスの移民問題に着目し、**Brexit** とプレミアリーグの関係性を明らかにすることを通して移民に対する誤解を明らかにした。多くのイギリス国民が **Brexit** を選んだ理由として移民を減らすことがあったにも関わらず、プレミアリーグの繁栄を続けるために移民である外国人選手を特別扱いすることは間違っているとと言える。陰ながらイギリス社会を支えている労働者がいることも忘れてはならない。現在、日本は外国人労働者を多く受け入れる方向に転換しつつある。将来、移民に対する誤解を生まないようにするためにも **Brexit** から学ぶことがあると考えられる。本論文はイギリス国民の移民に対する誤解を **Brexit** とプレミアリーグの関係性を通して指摘したことに意義があると言える。